

同志社大学

2012年度 卒業論文

論題：西陣機業者の地域生活と西陣機織産業の伝統の存続

社会学部 社会学科

学籍番号：19091045

氏名：桃尾 亮汰

指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：23,153字)

目次

序章.....	1
第1章 先行研究概観.....	1
1.1 統計的研究	
1.2 経済学的古典研究	
1.3 地域の社会学的研究	
第2章 松本通晴の研究.....	4
2.1 研究内容と成果	
2.2 西陣の土着性について	
(1) 機業者の出生地別比率	
(2) 世代別配偶者別出生地の比率	
(3) 機業の継承率と手工的職人的性格	
2.3 西陣の地域生活の特殊性について	
第3章 研究方法.....	11
3.1 調査方法	
3.2 質問項目	
3.3 被調査者の属性	
3.4 分析手法	
第4章 仮説適用範囲の検証.....	16
4.1 西陣の土着性－地域の停滞性－は存続しているか	
(1) 機業者の出生地別比率	
(2) 世代別配偶者別出生地の比率	
(3) 機業の継承率と手工的職人的性格	
(4) 結論	
4.2 土着性によって規定される地域生活の特殊性について	
4.3 構造的特質と仮説適用範囲の検証	
終章.....	29
注釈	
参考文献	

序章

京都市下に、西陣地域と呼ばれる場所がある。〈西陣〉という行政区域は存在しないが、松本通晴によれば通常西陣地区という場合、京都市の西北の一角すなわち、堀川通、北大路通、西大路通、丸太町通にかこまれたほぼ短形の範囲を指している(1968)。西陣織の名で知られるように、この地域一帯では古くから織物業が盛んに行われている。京都で織物作りが始まったのは5世紀頃のことであり、西陣の名は、この地域が1467年に起こった応仁の乱の際、山名宗全率いる西軍の陣地跡であることに由来する。

発展と衰退を繰り返しながら現在まで続く西陣機織業であるが、どうやら過去と現在では幾分構造や規模に変化が見られるようである。西陣地域や西陣機織業に関しては、これまで数多くの研究がなされているが、それらの多くが経済的・産業的な視点から書かれたものであり、地域での暮らしや、地域に暮らす人々に注目した研究は少ない。単なる流行り廃りではなく、繁栄や衰退には人々の意識に潜む理由があるはずであり、そう考えたことが本研究の動機である。また、私自身西陣の町に暮らしていたのにも関わらず、そこに根付く産業に触れ合っただけでこなかったことに勿体無さを感じたことも、本研究の動機のひとつである。西陣機織業の発展と衰退の歴史を辿り、過去から今日までに至る構造や規模の変化の要因を、西陣の地域生活に注目し、社会学的な視点から明らかにすることが本研究の目的である。

本研究の流れとしては、1章で先行研究についてまとめ、中でも特に本研究の根幹をなす松本通晴の研究を2章でとりあげた。そして第3章で調査方法、研究手法を述べ、第4章で1968年当時に提唱された松本の仮説が現在においても適用されるものなのか検証する。そして終章でまとめと今後の課題を記述する。

第1章 先行研究概観

1.1 統計的研究

あらゆる視点から数多くの研究がなされている西陣だが、西陣地域、西陣織の概要を知るために、まずは西陣を取り巻く経済状況や客観的な統計数値、歴史的背景、京都における西陣織産業の位置づけ、そして現在西陣機織産業が抱える課題などを見ておく必要がある。その際、西陣織工業組合のホームページである『西陣 web』が参考になる。西陣織の歴史や、西陣織の制作工程など、西陣に関する様々な情報が記載されている。統計的なデータとしては「西陣機業の現状に関する統計的分析」(小藤弘樹・篠原総一 2006)が参考になる。この研究は1975年以降の統計的なデータを元に企業数・実質総出荷金額の推移、平均実質出荷金額の推移、実質総出荷金額・実質原材料仕入金額の推移などをグラフに表しており、特に客観的なデータとして有効である。

西陣機業の製品は帯地やきものなどのいわゆる伝統産品をはじめ、ネクタイ、自動車の内装を含む室内装飾織物など多様である。また、その生産は京都府、滋賀県、兵庫県、福井県および石川県など広範囲に分布する、優れた技術を持つ小規模な企業によって形成されるネットワークの下で行われている。

西陣機業調査委員会は、こうした複雑かつ広範囲にわたる西陣機業の現況の把握と

今後の振興を目的として、1955年以降3年ごとにアンケート調査(全数調査)を行い、その結果を『西陣機業調査の概要(西陣機業調査報告書)』としてまとめている。本論文の執筆時点では、第17次西陣機業調査委員会(2004)による『西陣機業調査の概要(西陣機業調査報告書) 調査対象 平成14年』が最新版の報告書であることから、本論文での分析期間も2002年までに限定する。

第17次西陣機業調査委員会(2004)による西陣機業の近況報告内容は次のとおりである。

(1) 企業数、織機台数および従業者数は、生産数量がほぼピークに達していた1975年以降ほぼ減少傾向にある。2002年の企業数512社は1975年の45%水準、織機台数7,676台は23%水準、従業者数4,500人は20%水準である。

(2) 年間総出荷金額は、和装離れが進む中で、1975年以降は一時期を除いて増加傾向にあり、1990年にはピークに達した。その後、バブル経済の崩壊と長期不況の影響を受けて減少に転じ、2002年の年間総出荷金額約606億円は1975年の30%水準である。

(3) 1企業当たり出荷金額は、年間総出荷金額の推移同様に1990年ごろまで増加した後、減少傾向にある。ただし、2002年の1企業当たり出荷金額約121百万円は1975年の67%水準であり、年間総出荷金額ほどには減少していない。

(4) 西陣機業全体の粗付加価値率は、1975年以降1993年を除いて上昇傾向にあったが、2002年は一転して、1999年の過去最高水準91%から83%に低下した。この背景には、生糸価格の下方硬直性、デフレ圧力の強まりによる製品価格の低下傾向、ネクタイに典型的に見られるように海外からの安価製品の流入も加わって供給過剰体質が一向に改善されていないことなどがある。

これら4つのポイントは、近年の西陣機業が厳しい状況にあることを浮き彫りにしており、われわれの認識とほぼ一致する。(小藤・篠原 2006)

1.2 経済学的古典研究

西陣機業に関する研究は非常に多い。同じく西陣機業の研究者である松本通晴によれば、それらの多くは3種類に集約されるという。1つは、西陣機業をいかなる時点からマニュファクチュアの段階に入ったと規定するか、すなわち幕末に「原マニュ」の段階にあったとするか、明治20年代にマニュ段階に達したとするかである。2つめの研究視点は、日本の資本市場主義発展以前の段階において、織物業に関して西陣機業の占める位置がきわめて大きく、したがって西陣機業が他の機業と機業地にたいしていかなる影響を与えてきたか、もしくは他の機業と機業地が西陣機業といかなる関係をもちつつ発展してきたか、ということであった。3つめは、日本経済の二重構造の視角のもとに、繊維工業部門においてその最も典型的なもの—原料供給部門の巨大企業化にたいして、原料加工部門(織物業)の家内工業的性格—を見出し、しかも西陣機業を近代化の最もおくれた階層に属するものと規定して、西陣機業の生産・流通・労働の基本的諸過程が、関連産業も含めて、現代の資本主義発展の中でどう位置づけられる、あるいはこの「伝統産業」が、現代においていかなる適応形態—伝統と変動の矛盾の統合形態をとっているかを追求してゆこうとする。そして西陣機業がすでに徳川時代の中～末期までに形成したその〈構造的原型〉を、先染の高級品、製品の多種少量生産、手工的生産、および機業の零細性、下職—関連補助

産業の高度の分業化、織元・貸機関係、徒弟制度、仲買・問屋制度等々にもとめ、しかも現代においても、この〈構造的原型〉の基本的特徴が持続されているとみている。もっとも他面では、この〈原型〉が、現代の資本主義発展の中で変容してゆく態様をとらえることに中心課題をもとめ、そしてそれは次の諸点においてとくに指摘されるとしている。まず力織機化のいちじるしい傾向はいうまでもなく、製品の多種少量生産という西陣の特殊性に崩れがみえて、少種多量生産という大衆文化の動きがあらわれ、またそれに応じて、原料糸が従来为正絹からウール・化合織の比重を高めてきており、そしてそれによって織屋にたいする原糸メーカーの系列化が作りだされ、さらに労働力の不足と賃金の高騰、および大量生産の必要性から、丹後・出石地方への出機の大量進出も、特筆されることであるとしている。あるいは関連産業においても、撚糸加工では、西陣から北陸への外注増加が最近の変化の重要な一つとなっている（1968）。

1.3 地域の社会学的研究

最後に地域の社会学的研究を取り上げたい。松本通晴（1986）によれば、西陣機織業にはある種の構造的な特質があり、それが機織業の存続を支えたという。その特質とは、西陣機業が中心にあって、関連産業がこれに従属しつつも、両者が機能的に結合関係を持ちつつ、ひとつの巨大な有機的集積体を実現させているというものである。さらに、松本はこの構造的な特質を規定する要因が西陣の地域生活の特殊性にあるとし、その具体例を示している。それが〈機業者の定着性と機業の継承性〉であり、松本の言葉をそのまま借りれば、それは以下のようなものである。

以上、西陣機業の存続を規定する地域生活の特質について、これを種々の角度から考察してきたが、これらはさらに、次のように整理して理解しておくことができる。すなわち、西陣機業者は、西陣地域を基盤にして高い土着性を持ち、そしてこのことが、地域生活の根底において横たわっている。そのためここから、機業者における機業の継承性が高められ、配偶者の選択にもこれが大きく規定をおよぼし、したがって彼らの親類関係は、都市のなかでも特異な形をとって形成・持続されている。つまり機業者の土着性は、西陣内における諸関係・諸集団のヨコの体系を整序している構造原理であり、あるいは西陣における地域生活の特殊性でもあるといえるのである。それ故に、こうした停滞的基盤にたつ西陣機業および関連産業は、その構造的な特質を「基盤」によって規定されることになり、あるいはこれをいいかえて、機業と関連産業の伝統性は、この基盤にたつてはじめて存続を可能としているともいうことができる。

以上からわかるとおり、松本の研究においてそれ以前の研究と大きく異なるのは、西陣機業者の地域生活に注目した点にある。松本自身が著書中で述べているとおり、松本以前の多くの西陣研究は、経済史学や経済学の立場から行われたものであった。ただ、それらが全くないというわけではない。最近の研究では、地域ネットワークと西陣の産業を結びつけたものがある（芳野俊郎 2011）。

第2章 松本通晴の研究

2.1 研究内容と成果

以上、西陣地域や西陣織に関する様々な研究の概観を示してきたが、本研究で主に用いるのは、西陣を社会的に研究した松本通晴の理論である。松本の研究は、それ以前の研究がいずれも経済史学ないしは経済学の立場からする研究だったにも関わらず、機業者の地域生活に注目した研究だったという点で非常に有用なものである。序章でも述べた通り、過去から今日までに至る構造や規模の変化の要因を、西陣の地域生活に注目し、経済学・経済史学的な側面からではなく社会的な視点から明らかにすることが本研究の目的だからである。

松本通晴は、黒松巖らが提出した西陣機業の〈構造的原型〉（先染めの高級品、製品の多種少量生産、手工的生産、機業規模の零細性、下職—関連補助産業の高度の分業化、織元・貸機関係、従弟制度、仲買・問屋制等々）が、当時の資本主義経済の発展の中においても存続していることを認め、そして原型の存続が西陣の地域生活によって大きく助長されているとした（1968）。これを図表化したものが、図1である。

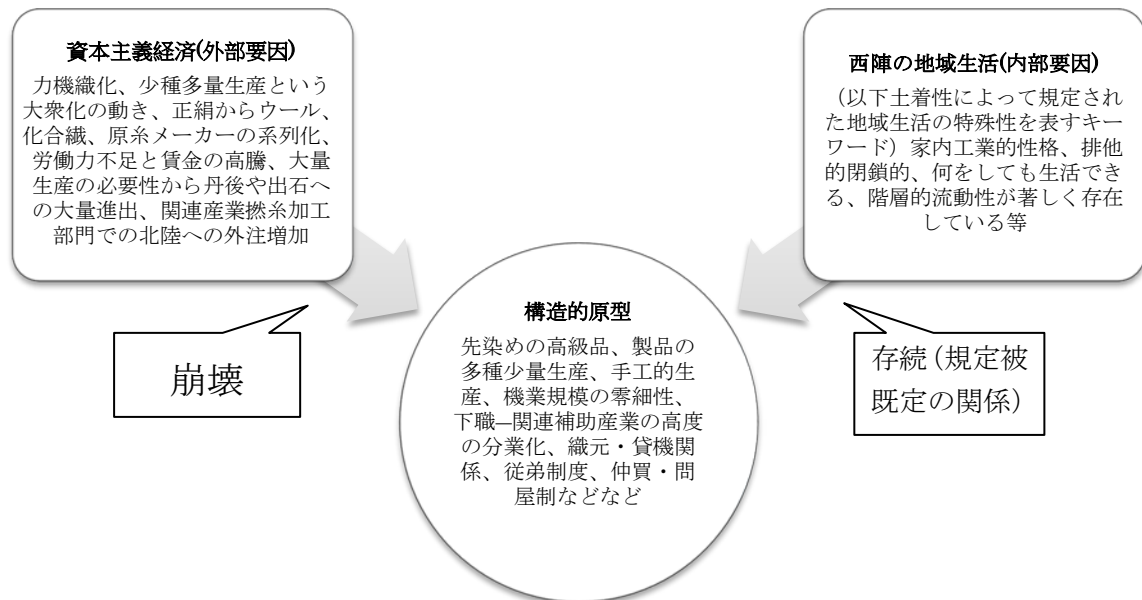


図1 松本通晴の研究

出典：松本通晴（1968）

続いて、具体的にどのような研究が行われてこのような結果を得たかを順を追って参照していきたい。

昭和37年8月現在の機業者数を約6,800（貸機業者を含む）と決定してこれを母集団とし、これから層化比例抽出法に基づいて701のサンプルを抽出した。このサンプルにたいして質問紙による留め置き調査法をとり、その回収率は約82%の573ケースであった。この有効調査票の分析を通して、機業者の定着性を明らかにしようとしたものが、松本の研究である。

2.2 西陣の土着性について

(1) 機業者の出生地別比率

まずは、構造的特質を存続させていると西陣の土着性（地域の停滞性）に関しての調査項目を見ていく。機業者の出生地を見ると西陣地区で生まれたものが55%にも及び、圧倒的であるとした。ここで注目されるべきは、機業者はその半数以上を西陣地区で生まれ成長した者によって補充されているということであり、ここに西陣の伝統性が存続してゆく地域の基盤があるように思われると松本は述べる（1968）。

表1：機業者の出生地別比率

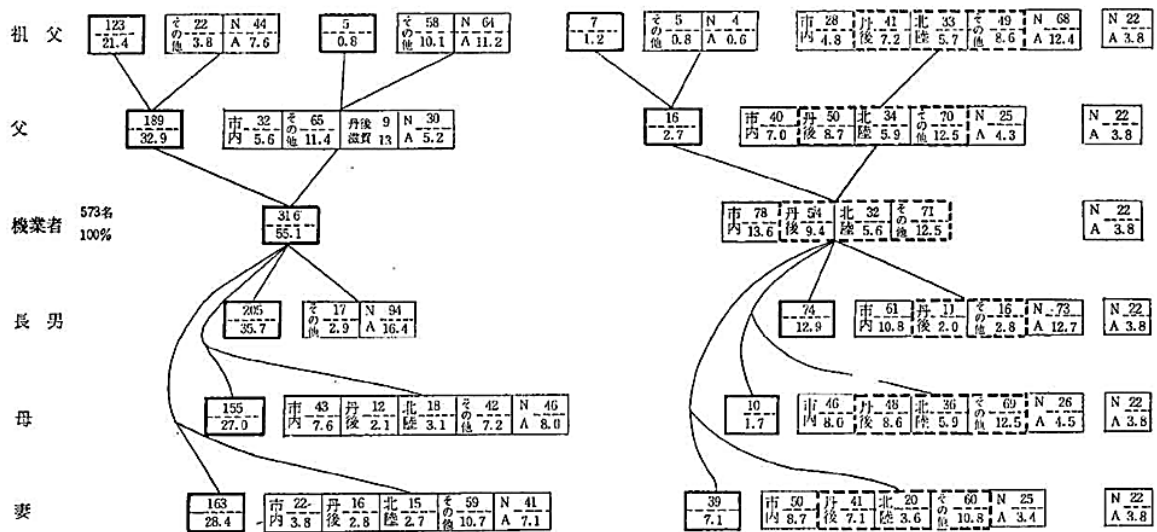
出生地	西陣 地区内	京 都 市 内	そ の 他					無回答	合 計
			丹 後 但 馬	北 陸	岐 阜	滋 賀	その他		
西 陣 機業者	55.1	13.6	10.9	5.5	1.9	1.9	7.3	3.8	100 (573)

出典：松本通晴（1968）

(2) 世代別配偶者別出生地の比率

続いて松本（1968）は、世代間の問題としてとらえることができるし、またそうすることによって、より一層の特徴を明らかにすることができるとし、表3を参照しながら次のように述べた。

表2：西陣機業者の世代別配偶者別出生地の比率



※ □内は西陣出身者を示す。上段の数字はサンプル数を下段の数字は全サンプルに対する比率をあらわす

出典：松本通晴（1968）

この表からは、一方の極において、現機業者、父、祖父、また長男の4世代がいずれも西陣生まれであるという場合が少なくとも全体の2割位置づけられるということである。そして現機業者、父、長男の3世代では、これが3割強に高まる。まさにこうした場合は西陣の土着した「西陣一家」といえるだろう。これにたいして、他の極には、現機業者の代に地方ないしは県外から移住してきて、機業についたという、いわば「新参者」が、約3割位置づけられている。もっともその両極の間には、いくつかのタイプも考えられるのであって、それらの主要なものは次の形態をとっている。

(1) 祖父の代あるいは父の代に、若くして丹後・北陸・近江などから移住してきて、その後西陣に住みついて人たちが（約10%）。(2) 祖父、父が京都市内で生れながらも、現機業者が西陣で生れている人たちが（約5~6%）。(3) 祖父、父、現機業者、長男のいずれもが、京都市内に生れている人たちが（約7~8%）。(4) 祖父と父が西陣で生れながらも、現機業者が西陣以外で生れている人たちが（約3%）等々である。

したがって以上のことから、西陣機業者は、数世代にもわたる西陣土着の機業者を中核として、その外延に西陣との密着度を次第にうすめながら拡散してゆく中間タイプの機業者をおき、さらに外周には、地方ないしは県外出身の機業者を配置している構造形態をとっているということである。（松本 1968：12）

そしてこの存在形態が、さらに次のような配偶者との関係によってより一層定着されるとし、次のように続ける。

そしてこの存在形態は、さらに、次のような配偶者との関係によってより一層定着される。すなわち、西陣出身の機業者の場合（全サンプル573のうち316、約55%）、妻も西陣出身であることが多く、彼らの半数以上を占めている（全サンプルのうち163、約28%）。また母親ではこれが5割弱（全サンプルのうち155、約27%）、そして父母とも西陣出身である場合が、彼らの中の約4割（全サンプルのうち122、約21%）に

も及んでいる。まさにこれらのことは西陣特有の現象であるといわねばならない。

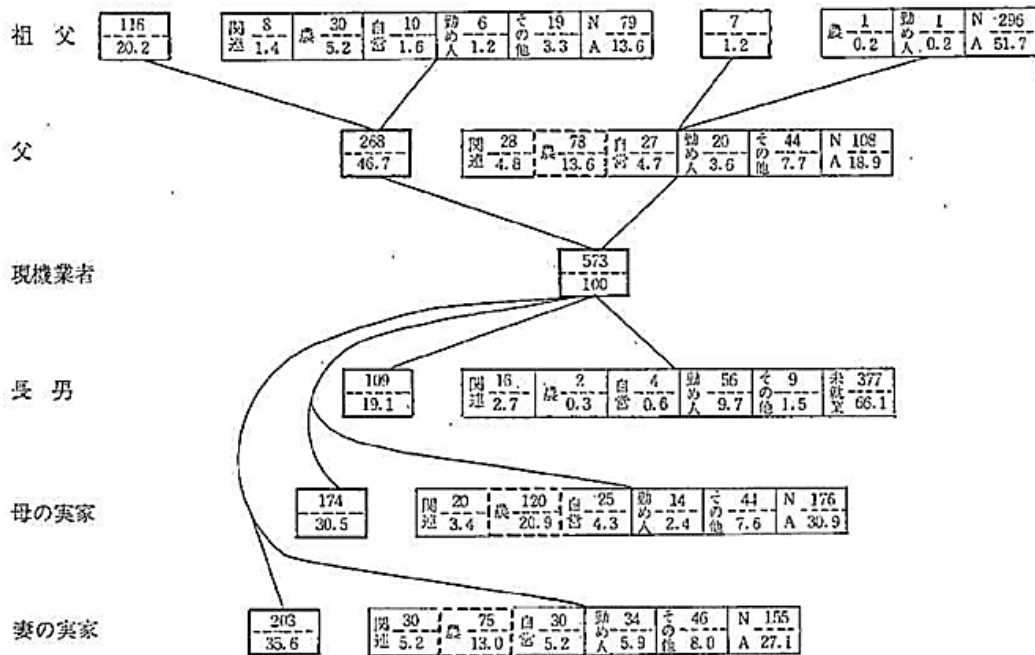
これにたいして、地方・県外出身の機業者（全サンプルのうち 157、約 27.5%）の場合は、妻も地方・県外出身であることが多く、したがって彼らは、同郷もしくは同郷から西陣などへ来ている女性を多く配偶者にもとめているといえるだろう。もっとも、このような両極化は、すでにさきの出身地別類型化においてみせたパターンと類似している。そしてこの両極化の間にあつては、西陣出身の機業者が、西陣と密着しながらも、配偶者を京都市内および地方・県外出身者にもとめて、西陣外へも志向する姿勢をとっている人たちや、または地方・県外出身の機業者で、西陣出身の女性を配偶者にもとめて、西陣に結びつこうとする姿勢をとっている人たちなど、多くをかぞえることができる。このように、西陣機業者を出生地別指標から類型化して、さらにこれを配偶者の出生地別指標と絡み合わせることによって、そこに、もっとも典型的な二つのタイプを摘出することができたのである。（松本 1968 : 13-14）

要するに松本は、「西陣一家」と「新参者」という 2 極化を指摘している。つまり西陣織を代々家業として継いでいる人は、妻も西陣出身であることが多く「西陣機業一家」を形成しており、一方で地方・県外出身の機業者は、妻も地方・県外出身者であることが多いということである。

（3） 機業の継承率と手工的職人的性格

最後に、機業の継承の問題について検証を試みる。この場合、就業年数や職業経験が深い関わりを持つことにも注目せねばならない。松本は表 3 について、次のように記述している。

表 3 : 世代間の機業の継承率と配偶者の実家の職業



※ □内は機業従事者を示す。上段の数字はサンプル数を、下段の数字は全サンプルに対する比率をあらわす。

出典：松本通晴（1968）

表 6 は（ここでは表 3）、機業のそれによると、さきの出生地別類型化において構成したパターンと類似した型をみいだすことができる。すなわち、現機業者からみた父との同職率が、46.7%の高率を示しているところに、一つの特徴がもとめられるが、それとともに、一つの極において、現機業者、父、祖父、および長男の四世代が、いずれも機業に従事している割合が約 2 割を占めて位置されているということである。そしてさらに、現機業者の妻の実家が織屋（35.6%）ないしは関連産業（5.2%）についている割合も 4 割強であり、また母の実家ではそれが 3 割 4 分であるという、まさに「西陣機業一家」を形成している。そしてこのことは、さきの「西陣出身」という土着性と結びついて、いよいよ西陣的特殊性を温存してゆくものである。これにたいして、いま一つの極には、父の職業、母の実家の職業、妻の実家の職業が、いずれも農業である湯合が位置づけられる。そしてそれが 1~2 割を占めている。すなわち、地方・県外出身者は多く農家の出であり、あるいは農家と深い関係をもった人たちであるといえよう。

ではこのような世代間の同職率、および配偶者の実家との同職率を背景においた現機業者が、現機業に従事するにいたるまでの職業経験上の種類がどうであったか、ということが問題になってくる。まず現機業者で前職の経験をもたない者が全体の 55.7%を占め、しかしこれには、西陣出身の機業者が、他地域出身の機業者と比較してもっとも多く（西陣出身者では約 6 割）、注目される。つまり自分の家が織屋であって、学校卒業後はただちに機業についている人たちが多いということである。他方前職を有する者も 43.8%あって、そのうち勤め人のプロセスを経てきた者がもっとも多く、次いで西陣関連産業、商工業自営、農林漁業の順になっている。しかし前職を

もっている機業者では、京都市内出身者においてその比率がもっとも高いようである。

したがって上述のことから、当然機業者の就業年数のことが問題になってくる。われわれの調査サンプル(573)では、就業3年以内が3.5%、3年以上5年以内が4.4%、5年以上10年以内が19%、10年以上20年以内が24.1%、20年以上が48.2%であった。それ故に5年未満という経験の浅い機業者が1割にも満たず、他方10年以上の熟練機業者が72%にもたっている。さらに10年以上の経験者について、全サンプルの年齢構成とクロスすると、20代で1%、30代で52%、40代で73%、50代で90%、60代で88%、7、80代で93%となり、したがって40代以上(84%)の機業者を中心に行っていることになり、ここに西陣機業の熟練を要する手工的職人的性格が如実にあらわされている。(松本 1968:14-16)

表4：長男がすでに機業を継承している場合

		つがせ た い	つがせ た くない	わ かり な い	NA	合 計
織 自	元 前	68.6	15.6	15.8	0	100 (51)
賃 機		43.0	32.1	17.2	7.7	100 (58)

出典：松本通晴(1968)

表5：長男がすでに機業以外の仕事についている場合

		つがせ た い	つがせ た くない	わ かり な い	NA	合 計
織 自	元 前	39.1	39.1	21.8	0	100 (28)
賃 機		17.1	62.0	20.9	0	100 (59)

出典：松本通晴(1968)

表6：子供がまだ職業についていない場合

		つがせ た い	つがせ た くない	わ かり な い	NA	合 計
織 自	元 前	31.5	33.9	27.8	6.8	100 (165)
賃 機		13.6	52.3	25.9	8.2	100 (212)

出典：松本通晴(1968)

表7・8・9(表4・5・6)において示されるように、長男がすでに機業を継承している場合(55.6%)でも、賃機業者では、3割以上も機業をつがせたくないとし、そして長男がすでに機業以外の仕事についている場合、あるいはまだ職業についていない場合では、これがさらに徹底して、5割ないし6割以上となる。もっとも織元・自前業者では、迷いがありながらも、子供に機業をつがせたいとする希望をもっている。(松本 1968:16-17)

これら種々の項目を受け、松本は西陣の土着性に関して次のようにまとめている。

以上、西陣機業者の定着性と機業の継承性について、これを種々の角度から考察してきたが、そこにおいては、いずれも高い比率をあらわすものであった。そして、祖父、父、自分、長男へとつづく機業継承と、西陣への土着性、および彼らを取りまいてさらにこれを補強している配偶者とその実家の同類性、これらがまさに西陣の基底にあって、西陣機業の構造的特質を地域的に規定する側面をなしている。しかしこれらが、具体的に、西陣の地域生活をいかに秩序づけているかについて、また、機業の構造的特質とそれがいかに関連しているかについては、後に明らかにするところである。ただその場合、「機業」および「西陣」にたいする機業者の態度に変化があらわれて、彼らの意識においては、西陣の特殊性を次第に弱めつつあることは、指摘しておかなければならない。

2.3 西陣の地域生活の特殊性について

続いて松本は、西陣の地域生活に目を向け、次のように述べる。

われわれは、西陣には機業と関連産業とがいずれも零細規模のもとに過度に集中し、そしてそれを支える機業者には、土着の西陣出身者が過半数を占めてその核心をつくっていることを明らかにした。そこでこれらのことをふまえて、次には、機業者の地域を基盤とする生活関係について、主として昭和38年11月に実施した調査をもとにして考察してみよう。ただしこの調査は、翔鸞学区の自前業者（50ケース）と賃機業者（50ケース）とにたいしてそれぞれ行なったものである。

まずはじめに、「町内」を機業者の主要な生活の場として設定しておこう。そして調査対象者の出生地別比率では、西陣出身者が、賃機業者において68%、自前業者において57%となっており、いずれもさきの調査よりは高く、したがって彼らの現町内における居住年数も、10年以上の者が67%におよんでいることを、前提としておきたい。

それで、このことを基礎として、町内におけるつきあい関係からみると、「気楽に入ってゆける家」はほぼどこの家にも数軒ある（約9割）が、しかしこれが、「気楽に手伝ってもらったり、貸し借りできる家」となると、かなり少なくなって5~6割程度である。それ故にここに、都市の近隣関係における一つの性格があらわされているようである。もっとも、葬式などでは、日頃あまりつきあいがなくても、弔問にでかけてゆくことを「義務」のように感じている人は、ほとんどである。（約9割）そのため、「近所づきあいがうるさくて住心地がよくない」と思う者も、まずいない。そして「町内会」の会合にはあまりでたがらなくても、「町内会」の必要性は感じており（約9割、親睦上、連絡が簡単、顔があわせる）、また町内の祭には積極的に協力する姿勢を取り（昭和38年7月調査、サンプル463、76.5%）、「町内会」中心の寄付にたいしても同調行動をとっている（同調査、69%）。そのため町内のしきたり（地藏盆、親睦会、リクレーション、おせんど、おしたけ祭、天神祭、初詣、婚葬など）にたいしてはこれを残そうとし（75.5%）、やめない方がよいとの考えである（70%）。

そしてこれらの場合、賃機業者がより伝統的なものへ志向して、それに同調する傾向が強く、他方西陣出身者と地方出身者との間には、こうしたことについての態度において著しい分裂が認められない。したがってここに、町内のある程度の独自性が意識されるにいたる。たとえば、「貧乏人の町内」、「封建的」、「夜がいつもおそい」、「へそまがりが多い」、「教育的でない」、「つきあいが少ない」、「地味」、「消極的」、「計画性がない」、「派手」、「協力的」、「まとまりがよい」、「リクレーションが多い」等々である。(松本 1968:25-26)

そして、地域の特特殊性について以下のようにまとめている。

以上のことから、町内を基盤とする近隣関係は、生産過程における機業者間の孤立性を補なって、ある程度の緊密性をつくりだしているものと思われる。しかしながら、機業者の集中は、機業における長時間労働の制約から、時間的余裕を欠いて相互の緊密な結合を妨げ、したがって近所づきあいが少なく、隣人にたいする知識にもうとく、あるいはまったく不案内でもあるということ、基底においていることを忘れるべきではない。(松本 1968:27)

第3章 研究方法

3.1 調査方法

第2章で述べた松本通晴の仮説が、現代のデータにおいても当てはまるか否かを検証するため、インタビュー調査を行った。松本が「西陣機業者の地域生活——とくに西陣機業を規定する地域生活の特質について」において行った調査は量的調査であるが、今回は質的調査を行った。今回、質的調査を行った理由は、松本の研究の仮説を検証するにあたって、西陣に暮らす機織職人の意識に目を向けることが重要だと考えたためである。質的調査のメリットには、甲南大学文学部社会学科・社会調査工房オンラインによれば以下のようなものがある。

1. 少数の被調査者の体験をインテンシヴ（集中的かつ徹底的）に探究することによって調査者がその体験を追体験して、その体験や事象の深層まで理解することが可能であること。
2. 形式的かつ画一的な、通り一遍の質問や限定された回答の選択肢を用いてのアンケート調査ではなしに、調査対象となっている事象や事実の多くの側面を多角的に、そして全体関連的に把握することが可能であること。
3. 調査者の主観的かつ価値判断的な認識や洞察力をとおして事象のより根源的な把握がなされ、ときに平坦で平凡な分析になりがちな事象の分析をより洞察的かつ普遍的に一般化することが可能であること。
4. 時間を遡って順を追って質問することができるため、事象の移り変わりなど

変化のプロセスと変化の因果関係をダイナミックに把握することが可能であること。

上記のように質的調査では、被調査者の内面に深く入り込んで調査が可能である。今回の調査においては、先程も述べた通り西陣に暮らす機織職人の意識に目を向けることが重要だと考えたため、質的調査を行うことが有力であると判断した。また本研究では、質的調査の自由度の高さという利点を活かし、松本の仮説を検証するという第一の目的だけではなく、過去の研究にはなかった調査項目を複数個加え、違った視点から西陣機織産業を俯瞰することに挑戦を試みている。

3.2 質問項目

質問項目については、基本的に松本の研究に沿うものとし、統計や先行研究で補完可能なものは補完をする形をとった。表中で色付き表記にしたものは、本研究独自で加えたものであり、西陣・西陣織に関しての質問に関しては、全てが独自の質問項目である。

表 7：被調査者の属性

被調査者の属性	1.性別
	2.年齢
	3.家族構成(現在)
	4.出身地
	5.居住地
	6.歴
	7.携わる工程＝機屋(織元、自前、貸機)あるいは下職—関連補助産業(図案、意匠紋紙、生糸、化繊糸、金銀糸、縫糸、撚糸、糸染、綜統、整理加工、買継商、織物卸商)

出典：松本通晴（1968）

表 8：土着性に関して

土着性に関して	8.西陣生まれの機織職人は多いと感じますか
	9.職人の継承率は高いと感じますか。また、こどもに仕事を継がせたいと考えましたか
	10.結婚は職人どうが多いですか(自分自身、周り)
	11.祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母、妻の出生地と、祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母の実家、妻の実家の、ご職業を教えてください

出典：松本通晴（1968）

表 9 : 町内の付き合い関係の関して

町内の付き合い 関係に関して	12.町内で「気楽に入ってゆける家」はどの程度ありますか
	13.「気楽に手伝ってもらったり、貸し借りできる家」はどの程度ありますか
	14.葬式などでは日頃あまりつきあいのない人でも「弔問」に出かけることを義務のように感じますか
	15.近所付き合いはうるさいと感じますか、居心地はどうですか
	16.「町内会」の会合にはどの程度出たいと感じますか
	17.「町内会」の必要性は感じますか
	18.町内で行われるお祭りには積極的に参加しますか
	19.町内会中心の寄付に対してはどう考えますか
	20.町内のしきたり(地藏盆、親睦会など)は残したいと考えますか
	21.周りの職人さん、織屋さん、また関連産業にかかわる人などとはどのようなつながりがありますか
	22.同じ工程を仕事とする人と、技術の共有は行われますか
	23.ほかの地域と比べて特徴的だと感じる場所をお聞かせください
	24.西陣での生活は閉鎖的、開放的どちらに近いと感じますか

出典：松本通晴（1968）

表 10 : 西陣・西陣織に関して

西陣・西陣織 に関して	25.西陣、西陣織の好きなおところ、嫌いなおところを教えてください
	26.西陣、西陣織は昔どうだったか、また現在どのようなだと思われませんか
	27.西陣、西陣織は今後どうなると思いますか。また職人としてどのように関わっていきたいと思いますか

出典：松本通晴（1968）

3.3 被調査者の属性

インタビュー調査を行った期間は2012年11月3日～12月14日のおよそ1ヶ月間である。調査では、調査用メモ用紙とバインダー、ボールペン、ICレコーダーを用いた。調査対象者5名の属性を表11にまとめた。

表11：調査対象者の属性

	日付	総調査時間	性別	年齢	家族構成(現在)	出身地	居住地	歴	携わる工程
A	2012/11/02 2012/12/05 2012/12/13	3:53:34	男	64	姉、妹、息子2人	西陣 西千本町	西陣 西千本町	大学卒業後(42年)	綜統
B	2012/11/28 2012/12/05 2012/12/14	1:38:30	女	76	姉、自分、弟、息子、娘、孫(息子3、娘2)	西陣 北区紫野大徳寺町	西陣 北区紫野大徳寺町	中学卒業後(59年)	織屋(織元)、手機 手機
C	2012/12/5 2012/12/13	1:24:46	女	41	(独身独居)、父、母、姉、弟	鹿児島県	北区	2002年から(10年)	織屋→プロデューサー(自身でデザインから織りまで手掛ける、企画室長であり、製作家)
D	2012/12/7 2012/12/14	1:17:50	男	67	(独居)、長女、長男、次女	熊本県	北区(西陣ではない。西陣は上京区である。)	17歳から、高校を辞めて西陣にきた。経済的な問題がきっかけ。手機の織屋に住み込みで37年間修行(49年)	織屋(織元)、手機
E	2012/12/14	1:08:49	女	39	(独身独居)、父、母、兄	大阪府	上京区西陣 マンション	芸術大学卒業後(18年)	織屋(織元)→綴織、伝統工芸士

Aさんは64歳の男性で、大学を卒業後、父親の後を継ぎ綜統⁽¹⁾として働かれている。出身地、居住地ともに西陣地域である(実家)。町内会長をしており、家の前にある通りで工芸展を主催するなど、地域との関わりも密である。

Bさんは76歳の女性で、中学校を卒業してすぐ(当時17歳)父親の友人のもとで修行し、織元である実家で家業を継いだ。出身、居住地ともに西陣地域である。手機の織屋であり、現在は伝統工芸士として西陣織会館で実演などをされている。

Cさんは41歳の女性で、自身でデザイン(図案)から織りまでを手がけるプロデューサーとして2002年から西陣織職人として仕事をされている。鹿児島出身で、現在は北区に居住している。高校時代に見たNHKの番組に影響を受け、京都で和裁を学ぼうと考える。高校卒業後、京都の5年制の学校に入学し、日本中のあらゆる織物に触れる。その後、地元に戻り、織物を学び、再び東京の大学で織物の背景にある文化を学ぶ。卒業後、京都の大手織物メーカーに数年勤めたのち、現在は西陣織会館で働かれている。

Dさんは67歳の男性で、17歳のとき高校を辞め、経済的な理由で地元熊本から西陣に來られた。手機の織屋に住み込みで修行し、37年そこで働いた。現在は北区に居住しており、西陣織会館で働いている。(西陣・町ミュージアム構想検討委員会)を主催し、シンポジウムなどを開催して、西陣織の魅力を伝える活動を行なっている。

Eさんは39歳の女性で、芸術大学を卒業後、織元にて7年間働いた。大学での専攻は織物とは全く関係のない分野であったが、氷河期の影響や、手に職をつけたかったという動機から西陣織(手機綴織)の職人として働くことを決めた。織屋で働く間は織屋の上階に

ある寮で暮らしていたが、現在はマンションで一人暮らしをしている。

3.4 分析手法

ここで再度、松本の仮説と、本研究の分析手法の確認をしておきたい。まず松本の問題意識は、以下の2文に集約される。

構造的特質も種々の要因の相互関連のもとに存続を可能としており、したがってここでの「西陣」という地域での独特の生活も、これを補強・温存していることは否定出来ない。(松本 1968:3)

そして大都市京都の中に、最も伝統的な在来産業が、現代にも適用しつつ存続しているのは、やはりそこに、特殊京都的な、または特殊西陣的な諸要因の規定していることを考えずにはおかないものがある、ということである。(松本 1968:3)

そして、仮説においては以下の1文に要約される。

西陣機業者は、西陣地域を基盤にして高い土着性を持ち、そしてこのことが、地域生活の根底において横たわっている。そのためここから、機業者における機業の継承性が高められ、配偶者の選択にもこれが大きく規定をおよぼし、したがって彼らの親類関係は、都市のなかでも特異な形をとって形成・持続されている。つまり機業者の土着性は、西陣内における諸関係・諸集団のヨコの体系を整序している構造原理であり、あるいは西陣における地域生活の特殊性でもあるといえるのである。それ故に、こうした停滞的基盤にたつ西陣機業および関連産業は、その構造的特質を「基盤」によって規定されることになり、あるいはこれをいいかえて、機業と関連産業の伝統性は、この基盤にたつてはじめて存続を可能としているともいうことができる。(松本 1968:28)

要するに松本は、西陣の構造的特質（構造的原型）が、西陣機織業者の土着性（地域の停滞性）＝基盤によって規定されている（あるいはこの基盤にたつてはじめて存続が可能となる）とし、これを研究の成果としたのである。そこで本研究ではまず、西陣の土着性というものが現在でも存続しているのか、または崩壊しているのか、あるいは形を変えているのかを検証していきたい。

現在の西陣機織の様相は、一見すると松本の研究が行われた1968年当時とはかなり変わっているように見える。たとえば1962年の西陣機業は、織屋6,913軒、織機21,796台、全従業者数21,800人を数えていたが（松本 1968）、2008年では総企業数1,129、織機5,473台、従業者数3,815人と大幅に減少している（第19次西陣機業調査委員会 2010）。ここから1968年から現在に至るまでに、日本は資本主義経済の発展（具体的には高度経済成長期を経てからのバブルの崩壊など）を経て、西陣織も少なからずその影響を受けていることがデータからも読み取ることが出来る。

それら外部的な要因の影響にも関わらず、西陣機業の構造的原型が存続しているとし、その原因を西陣の地域生活にもとめたものが松本通晴の研究であるが、しかしその理論は

現在のデータにおいては未だに検証されていない。よって、今回の研究では松本が提唱した上記の理論（仮説）を現在のデータにおいても有用なものであるか検証する形で行うものとする。その結果として、西陣機織研究や、ひいては今後の地域の社会学的研究に微力ながらも貢献できれば幸いである。

研究の流れとしては、松本通晴の研究に沿い、まず現在においても1968年と変わらず西陣の土着性が依然として存続しているのかを調べ、続いて土着性を基盤とする地域生活の特殊性においても同様に検証する。そして最後に、構造的特質（構造的原型）のひとつひとつが存続しているか否か、あるいは変化しているかを確認し、松本の仮説が現代においても適用されるのかを確認する。それに加えて、土着性やその他の要因との関係性を突き止めることを試みる。つまり本研究は、図2の枠で囲んだ部分が現代のデータにおいても当てはまるのかを検証するものである。



図2 本研究の分析手法

出典：松本通晴（1968）

また、西陣地域の厳密な規定がない（行政上の区画が存在しない）という問題があるが、この研究においては、松本通晴のいう西陣地区、すなわち京都市の西北の一角にある、堀川通、北大路通、西大路通、丸太町通にかこまれたほぼ短形の範囲を西陣地区と定義する。

第4章 仮説適用範囲の検証

4.1 西陣の土着性—地域の停滞性—は存続しているか

まずは、構造的特質を存続させていると松本がいう西陣の土着性（地域の停滞性）が現在ではどのような状態となっているかを検証していく。1968年には、「西陣一家」と呼ばれるような家が多数存在するほど、すなわち西陣生まれの職人が過半数を占め、そのよう

な人たちの多くは妻も西陣織職人であったというほどに西陣の職人はその地に根付いていた。果たして現在ではどうだろうか。

(1) 機業者の出生地別比率

まずは機業者の出生地別比率に関して、実施したインタビュー調査の問8の回答と比較してみたい。(問8.西陣生まれの機織職人は多いと感じますか)

まずは西陣生まれの職人A、Bさんから。Aさんは、昔は多かったが、現在ではそのようなことはないと言い、同じくBさんも昔は半数以上が西陣出身の人だったが、現代では少ないと話していた。続いて西陣以外の地で生まれた職人C、D、Eさんに関して。鹿児島で生まれ、10年ほど前に西陣にきたCさんは、西陣生まれの職人が多いと感じたことはないという。また、以前織屋さんで働いていたとき、周りのほとんどの職人さんは他府県出身の方で、女性の人であったという。大学の求人を見た人(特に芸術大学のデザイン科の人など)が多かったように思われるとのことだった。熊本出身のDさんは、西陣織職人そのものが少ないと言い、その理由として、西陣産業に展望がないことや、労働環境が劣悪(賃金が少ないなど)であることなどを指摘した。当時(昔)は職人が技術を育てる姿勢を持っていたし、その体力(お金)もあったという。大阪出身のEさんは、職人自体は減っていると思うが、その中でも西陣生まれの職人は多いと感じるという。ただ、メーカーで働いていた当時は職場の人の出身は全国バラバラで、社長も他府県出身であったという。また、昔とは働く形態が変わっており、現在は父が職人で息子は兼業、つまりお手伝いのような形で家業に携わっているという。そしてその息子が継がなければ、その代で途絶えてしまうという。後継ぎがおらず自然消滅しているところも多いようだ。

Eさんの回答を除いては昔と比べて西陣生まれの職人は減少している、またはいまでは西陣生まれの職人はほとんどいない・聞かないとの回答であった。これは、1968年において西陣地区で生まれたものが55%にも及び、圧倒的であったことと比べると、明らかな相違である。

また、現在では大学を卒業して西陣織に従事する人も多いらしく、CさんやEさんの以前の職場においては他府県出身の方がほとんどであったようだ。また、先のことに関しても(詳細は後に出てくる継承率の項目で述べるが)西陣織を継がせようと考えている人は現在ではほとんどおらず、他府県からやってくる人もいるが、職人自体の数が圧倒的に減少していると、全員が声を揃えた。

(2) 世代別配偶者別出生地の比率

続いて、世代別配偶者別出生地の比率に当たる質問項目である。まずは配偶者に関するものについて。(問10.結婚は機織職人どうしが多いですか(自分自身、周り))

この質問に対して、西陣生まれのAさんは、そんなことはないし、自分もそうではないと回答した。また、同じく西陣生まれのBさんも、昔は多かったがいまではそうではないと感じている。ただ、Bさん自身の主人は職人である。そしてC、D、Eさんも、そういった話は聞かないし、結婚の話聞いたとしても職人どうしではないとのことであった。Eさんの回答は興味深いもので、今では職人同士が結婚などしたらともだおれしてしまうので、現実的な話、お金を出してくれるパトロン的な人物がいてくれると助かるということだった。

5人のうち最高齢のBさんのみ、主人が機織職人ということだったが、その事例さえも結婚する以前は職人ではなかったとのことである。昔は職人どうしの結婚が多かったと語る人もいたが(Bさん、Dさん、Eさん)、自身はそうではないということだった。全員が、現在では職人どうしの結婚はほとんど聞かない、または全く聞かない・ないと強調するような回答だった。

次に、世代別の出生地、職業を知るための質問項目、〈問11.祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母、妻の出生地と、祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母の実家、妻の実家の、ご職業を教えてください〉について。出生地についての回答をまとめると表12のようになる。

表12: 祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母、妻のうち西陣出身者

A	父、自分、長男
B	祖父、父、自分、長男、母
C	いずれも該当しない
D	長男
E	いずれも該当しない

AさんとBさん以外は、松本が最も多数が当てはまる2極とした、「西陣一家」「新参者」にはあてはまらない。

(3) 機業の継承率と手工的職人的性格

続いて、機業の継承率に関しては、まず〈問11.祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母、妻の出生地と、祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母の実家、妻の実家の、ご職業を教えてください〉の職業についての回答をまとめておく。それが表13である。

表12: 祖父、父、現機業者(ご自身)、長男、母、妻のうち西陣機業者

A	祖父、父、自分
B	祖父、父、自分、母
C	自分
D	自分、妻
E	自分

そして〈問9.職人の継承率は高いと感じますか。また、こどもに仕事を継がせたいと考えましたか〉という継承意識に関する質問への回答は以下の通りであった。

Aさん(綜統・長男がすでに機業以外の仕事についている)は、継がせようとは考えなかったという。Bさん(織元・長男がすでに機業以外の仕事についている)は最近では継ぐ人はめったにいないし、こどもには継がせようとは思わなかったと仰っていた。自身が継いだ時からそうきめており、子供には自由にさせたかったという。稼げないだろうという現実的な問題もあったようだ。Cさん(自前・子供がまだ職業についていない)は子どもができれば、Cさん自身がそうだったようにその子の意志に任せたいと言う。まわりでやめた人の話はあまり聞いたことがなく、ただ、Cさんに機をゆずってくださった方はやめてしまったという。また、「杼」を作っている職人さんも、後継ぎがおらずやめてしまったそうだ。Dさん(自前・長男がすでに機業以外の仕事についている)も継がそうとは全

く考えなかったようだ。その理由として、西陣産業に展望がない、賃金が少ないなど労働環境が劣悪であることの理由を挙げていた。今と比べ昔は職人が技術を育てる姿勢を持っていたし、その体力（お金）もあった、と話されていたのが印象的であった。最後にEさん（自前・子供がまだ職業についていない）は、西陣生まれの人の継承率はすごく下がっていると思うと言い、かえって外からの人のほうが多いイメージがあると話す。ただEさんによれば、そういう人たち（外からの人たち）が西陣の織屋を継ぐのは難しいという。西陣で仕事を継ぐということは、家を継ぐということであり、そこにはやはり情があるからだそうだ。西陣において商売は生活であり、会社ではなく家で仕事をしているのが京都なのである。そうはいつても外からやってきた人が商売の土壌がほしいとなると家を継いだほうがいいのは事実である。また、メーカーに育てる力がなくなっており、職人ひとりを育てるのに1年に100万円かかるといわれるが、長期的にそのお金を出し続けることさえできない状態だという。この話はDさんの話されていた内容とも一致する。本当はみんな育てたいと思っているようだ。

以上について、松本の代と最も大きく異なる点は、「西陣一家」の形をとるAさんやBさんを含むこの5人において、子供への機業（あるいは関連産業）の継承率が現時点で0%であるということである。加えて、上記の回答から分かる通り、まずは継がせたいと思う人が一人もいなかったことが注目される。継がせたいとする人が0人、わからない（意志に任せる）という人が1人。継がせたくないとする人が4人であった。これらからいえることは、こどもに機業（または関連産業）を継がせようとする意志が、1968年当時と比べて明らかに低下していることである。そして問10の部分でも述べた通り、現在では職人どうしの結婚はほとんど聞かない、または全く聞かないということからも、「西陣一家」はほぼ崩壊していると言わざるを得ない。

(4) 結論

ここまで土着性を表す指標について、1968年当時と現在のデータを比較検証してきたが、一言でまとめると、土着性は崩壊している。つまり、現在では西陣生まれの職人はほとんどおらず、配偶者に職人を選ぶ人も少ない。加えてこどもに継がせたいとする意識も低くなっており、次世代での急激な回復が見込めるわけではない。このような結果から、1968年の段階では高かった土着性が、現在ではほぼ崩壊していると結論づけた。土着性が現在どうなっているか明らかになったので、次にそれを基盤とする地域生活について検証を行う。

4.2 土着性によって規定される地域生活の特殊性について

続いて、土着性を基盤とする西陣の地域生活に目を向けていきたい。こちらに関しても、1968年と同様の質問をし、比較する形をとった。それをまとめたものが表13、14、15である。

表 13 : 地域生活に関する質問項目と回答 (1)

	町内で「気楽に入ってゆける家」はどの程度ありますか。	「気楽に手伝ってもらったり、貸し借りできる家」はどの程度ありますか。	葬式などでは日頃あまりつきあいのない人でも「弔問」に出かけることを義務のように感じますか。
A	ほとんどがそう(町会長でもある)。	今はあまりない。	その人との付き合いの深さによる。義務とは感じないが、町内の人のものには基本的に参加する。町の外の人となると、付き合いの深さによる。
B	半数以上がそう。生まれた時からの馴染みの家。	おなじく半数以上。昔からのかわり。	義務には感じない。町内のものには必ず行く。自分の家もしてもらったからというのがあるし、当たり前のことと思っている。
C	全くない。	ない。	特に感じない。
D	4軒ぐらいかな。向かいとか	3軒ぐらい。	義務とは思わない。同じ町内であれば行く。
E	全くない。	全くない。	ない。というかできない。

出典：松本通晴 (1968)

町内における付き合い関係から見ると、「気楽に入ってゆける家」について、西陣出身者である A さんと B さんはほとんど、あるいは半数以上がそうであり、昔からの馴染みの家であると答えている。それとは対照的に他府県出身の C さん、E さんは全くないと答え、D さんは向かいの 4 軒程度であると回答している。ここで、C さん、E さんはマンションに一人暮らしである。「気楽に手伝ってもらったり、貸し借りできる家」に関して、B さんが昔と比べて減ったと話す以外はほぼ同様の結果が得られた。また、日頃あまりつきあいのない人への「弔問」に関して、義務と感じる人はおらず、A さん、B さん、D さんは町内であれば行くのは当然・当たり前であると考えているようであった。そして E さんについては、町内での付き合い関係がなく、気持ち的に行くことができないとのことであった。近所付き合いをうるさいと感じるものはないが、ここに世代あるいは出身地による大きな差異が見られる。西陣出身者である A さん、B さん、そして他府県出身であるが西陣地域に 50 年近く居住する D さん (明確な行政区画がないため、D さん自身は西陣地域に住んでいるとは考えていないが、ここでは松本通晴の堀川通、北大路通、西大路通、丸太町通にかこまれたほぼ短形の範囲を西陣としているため西陣地域に居住しているとする (1968)) は、近所付き合いが存在するうえで、うるさくない、居心地は悪くないとしているが、他方他府県出身で居住年数も短く、A、B、D さんに比べて一回り若い C さん、E さんに関しては近所付き合いそのものがないとしている。

表 14 : 地域生活に関する質問項目と回答 (2)

	近所付き合いはうるさいと感じますか、居心地はどうですか。	「町内会」の会合にはどの程度出たいと感じますか。	「町内会」の必要性は感じますか。
A	うるさいとは感じないし、居心地もわるくない。	義務と感じる。町内会長をしているが、それは立場には関係がないこと。	必要であると感じる。
B	居心地は昔から変わらずわるくない。	日常的な会合はない。お祭りや地蔵盆があるときに会議が行われる。ほとんど出席するし、参加したいと思う。前よりは減っている。	あったほうがいいと思う。老人が多い。
C	近所付き合いがないので、特にうるさいとは感じない。	参加していない。	子供がいたり、結婚したときには必要になるだろうと感じる。
D	特にうるさいと感じない。普通。周りの人もそう考えていると思う、あまり干渉しあわないというか。西陣はもっと親密なんじゃないかな。	義務だと感じる。町内会の組長(10組あるうちのひとつ)をしている。	コミュニケーションという意味では必要だと思う。
E	ないからうるさいとは感じない。京都では学生の暮らしの延長がマンション暮らしにきている。つまり学生と同じ扱い、お客さんのような扱いを受ける。	町内会に入っていない。マンションには町内会の案内が来ない。	感じる。なにかあったときに怖いから。孤独死の問題もあるし。

出典：松本通晴 (1968)

続いて町内会、町内のしきたりに関する質問に関してみていきたい。まず町内会の会合については、AさんやDさんは義務と感じており、Bさんは積極的に参加する姿勢を見せている。そしてCさん、Eさんは町内会に参加しておらず、町内会の案内も来ないという(マンション)。また、町内会の必要性に関しては、全員が必要と感じており、町内会に参加していないCさんやEさんでさえも、なにかあったときのために必要であると強く感じていることがわかった。

表 15 : 地域生活に関する質問項目と回答 (3)

	町内で行われるお祭りには積極的に参加しますか。	町内会中心の寄付に対してはどう考えますか。	町内のしきたり(地蔵盆、親睦会、リクレーション、おせんど、おしたけ祭、天神祭、初詣、婚葬など)は残したいと考えますか。やめないほうがよいと考えますか。
A	必然的に参加するものだと思っている。当たり前のようにそこにある。	基本的には町費以外でまかなっている。基本的には賛成で、必要であると考えている。毎担当番が取り仕切っていて、当番の時には義務として集めなければならない。	できる限り残していきたいと感じる。そして、新しく土地に入ってくる人にも覚えてもらいたいと思う。町内に住んでいるという存在感を示すためにも必要なものであると思う。
B	いつも見に行っている。	賛成。基本的には町費からまかなっている。大徳寺町。1年3,600円。	これからも残していきたいと感じるし、周りからの文句も特にならない。大徳寺町は風致地区であり、マンションなどが建たず、新しい人が入ってくることはない。
C	参加していない。案内がないからわからない。手作り市など、案内があれば参加したい。	ものによるが、地蔵盆などにはしたいと考えている。	残していってほしいと思う。結婚したり、子供が生まれたときには参加したい。マンションだからか、そもそも案内がこない。
D	積極的ではないけど参加している。夜回りとかも。義務かな。	義務的な形ではしないし、してくださいとは呼びかけない。あくまで本人の意思に任せている。	残していきたいと考えている。コミュニケーションという意味で。
E	参加していない。呼ばれない。	してないのでわからない。してみたいとは思いますが、周りの目もあってにくい。	残していきたいと感じる。

出典：松本通晴 (1968)

町内で行われるお祭りに関しては、Aさんは当たり前のように参加しており、Bさんについてもいつも見に行っているとのことであった。Dさんは義務のように感じている。そしてCさんやEさんは、参加したくても案内がなく、呼ばれないから参加することができないとのことだった。寄付活動に関しては、基本的に全員が賛成の姿勢をとっているが、Dさんについてはあくまで任意のものであるとの認識があり、CさんEさんについては賛成だが、町内会に入っておらず周りの目もあり寄付しにくいとのことであった。地蔵盆や親睦会など町内のしきたりに関しても、町内会に参加していないCさんやEさんを含め全員が残していきたいとの考えであった。

これらの調査から、明らかに特徴的なことは他府県出身者、特にここ2、30年の間に西陣に移り住んできたマンション居住者と、西陣生まれ西陣育ちの土着一家の間には、地域に対する関わり方に大きな違いがあるということであった。つまり、全員が地域への関わりには積極的な姿勢を見せているにも関わらず、実際にはCさんやEさんのような立場にある人が地域と関わりたくても非常に関わりづらいという構図が発見されたのである。Eさんいわく、マンション暮らし・独居という条件においては、そもそも町内会の案内がくることはほとんどないらしく、ここ5、6年でようやくマンション暮らしの子供を持つ家庭に町内会の案内がなったという(それもいくつかの地区においてのみであるが)。

こういった事実は、たとえば質問の回答にあるAさんの新しく土地に入ってきた人にも町内のしきたりを覚えてもらいたいという発言などとは矛盾するものであり、したがってここに西陣地域の特殊性が見受けられるのである。すなわち、先ほど土着性が崩壊したことを述べたが、ここには明らかに西陣一家的な文化が根強く残っていると考えられる。そしてこの仮説は次の表16によって明らかにされるものである。

表 16：西陣という町のイメージ（閉鎖的か開放的か）

	西陣での生活は閉鎖的、開放的どちらに近いと感じますか。
A	世間一般では閉鎖的にみられていると思うし、実際「一見さんお断り」の文化はある。外の人に対しては。京都、特に西陣とか室町で強いとちやうかな。花街(ここでは上七軒を指す)も、昔(祖父の時代から戦後)は西陣の旦那衆が上七軒にいった。丁稚は千本通に。でも、西陣での生活はあけっぴろげやで。みんな自由に暮らしている。
B	西陣での生活は、全然閉鎖的とは感じなかった。みんなで仲良く遊びにいったりしたし。もちろん織屋さんどうしの秘密はいまでもあると思うけれど。今でも他の織屋さんが勝手に入ってはいけないという話も聞く。
C	めっちゃめちゃ閉鎖的だと思います！一見さんお断りの文化を肌で感じている。なじみの人しか受け入れない。そのことについて悩んだことも多い。いけずで、素直じゃない。ごめんなさいが言えない。織屋さんどうしの交流はないです。一緒に仕事をする人や、ライバル同士が密集して生活して、喧嘩をしないようにと考えている結果として、お互い不干渉なのだと思います。ことなかれ主義。鹿児島は武家組織。
D	閉鎖的だと思う。それが、西陣の街の構造を作り上げていると思う。地場産業が作り上げられてきた。閉鎖的なのはいまでも昔も変わらない。織屋さん同士もそうだと思うし、大宮とか千本とかの商店街も閉鎖的。それは、よくいえば誇りを持っているともいえる。「他とは違う」という考え方があり、まねする必要はないという気持ち。たとえば大宮と千本がお互いにそう思っている。商店街のお店の人と話すと感じること。
E	閉鎖的だと思う。昔から変わらずずっと。日常的には感じないが、マンションと長屋暮らし時代の生活とを比べて感じる。寮に暮らしていた時代は掃除(かどはき)や挨拶に厳しかった。「おはようございます」という挨拶ひとつのなかにもいろいろな暗黙の意味が含まれていて、それに気づく必要があった。長屋とアパートの両方に暮らして、露骨に扱いが違くと体感した。(1階に住んでいる人と2階以上の人)

ここで明らかになったことは、やはり仮説の通り、西陣出身者と地方出身者の間に、西陣への異なるイメージがあるということである。西陣出身者 A さんや B さんは、西陣での地域生活を開放的であるというが、一方で地方出身者である C さん、D さん、E さんは閉鎖的と感じている。そしてそこには、この質問項目においてはたびたび聞かれた〈閉鎖的〉〈いけず〉という単語に加え、〈ことなかれ主義〉〈不干渉〉といった西陣地域の特殊性が浮かび上がったのである。そして、これらの特殊性については松本の研究でも、触れられている。

西陣企業者の土着性が、地域生活の根底にあって、地域生活を整除していることを述べたが、この土着性-停滞的要因は、西陣の人がときに使う「西陣ムラ」という言葉の中にもあらわされている。それはもちろん、特別の深い意味をもつのではないけれども、その言葉によって与えられる特殊なものの存在を、われわれは感じとることができる。しかしここでは、この「西陣ムラ」という言葉から、どのようなイメージが機業者たちによっていだかれているかをみることにしよう。その場合、彼らの描いた

イメージは次の五つのタイプに類型化することができる。(1) 機業者の日常用語の一つではあるが、大した意味がない、とするもの。(2) 織物業者—零細な織物業者、家内工業—の集中しているところ、とするもの。(3) 軽蔑ないしは劣等感をあらわしている、とするもの。そして具体的には、「食生活の劣悪」、「労働条件が悪い」、「何をしても生活ができる」、「いつも仕事ばかりしている」、「もっさりしている」、「何事にもおくらせている」、「古い封建的遺物」、「島国的な因習にとらわれている」、「計画性のないその日暮し」、「教養がない」、「視野がせまい」、「世間とあまり交渉がない」、「排他的」等々である。(4) 生活状況の特殊性をあらわしている、とするもの。すなわち具体的には、「何をしても生活ができる」、「いつも仕事ばかりしている」、「織物業者がたがいに気楽に話しあえる」、「小さい織物業者が集中している」、「労働条件劣悪」、「食生活劣悪」、「古いしきたりがある」、「西陣だけの伝統生活態度がある」、「計画性なくその日暮し(金使いが荒い、時間の不規則、生活が派手)」、「排他的、競争的、ねたみ」、「昔から独自の地域に住む、えこじ、自負、閉鎖的な気風がある」、「ちょっとしたことでもすみずみに知れわたる」、「いろいろなことで何かとかちあう」等々である。(5) 田舎から来た人が西陣のことをこのようにいっている。

これらによると、西陣地域の特殊性は、きわめてヴィヴィッドに描かれていることがわかる。そしてこれらの「諸特徴」は、いずれも、機業の構造上の特質もしくは地域の停滞性—土着性から、説明できる特質であることも知られる。すなわち、西陣は、前者の観点から、零細な家内工業の織物業者の集中しているところであり、しかしここでは、労働条件がきわめて悪いうえに、仕事ばかりしているところといわれる。また各種の関連産業も集中しているために、何をしても生活ができるところのようである。他方後者の観点からでは、西陣は排他的閉鎖的であって、西陣外との、あるいは個々人間の交渉に乏しく、そして一面、えこじ、自負のパーソナリティを、他面競争、ねたみのパーソナリティを特徴とし、しかし彼らの社会関係が交錯しあい、インフォメーションの網も広くはりめぐらされて、些細なことまでも人々に知れわたる風土をもち、また伝統・因習等も根強く残って、これらのために外部からは、「おくらせている」とか、「視野がせまい」とかの印象ももたれている。ともかくも、これら両者(機業と地域)が規定・被規定の関係にあって、全体としては西陣が一つの完結体の様相をとっているといえるだろう。(松本 1968:29-30)

つまり、1968年にこのように描かれた地域の特殊性は、部分的にはあるが、特に排他的閉鎖的であるという点において、現代においてもあてはまるものであるということがわかったのである。

松本は、西陣の地域の特殊性は土着性を基盤として成り立つものとしたが、それ自体は事実であったことは間違いない。しかし、西陣の土着性が崩壊した現在でもなお、西陣の生活は特徴的であるということは、そのような文化が西陣の人々の意識に根強く残っているということなのである。

4.3 構造的特質の存続確認と仮説適用範囲の検証

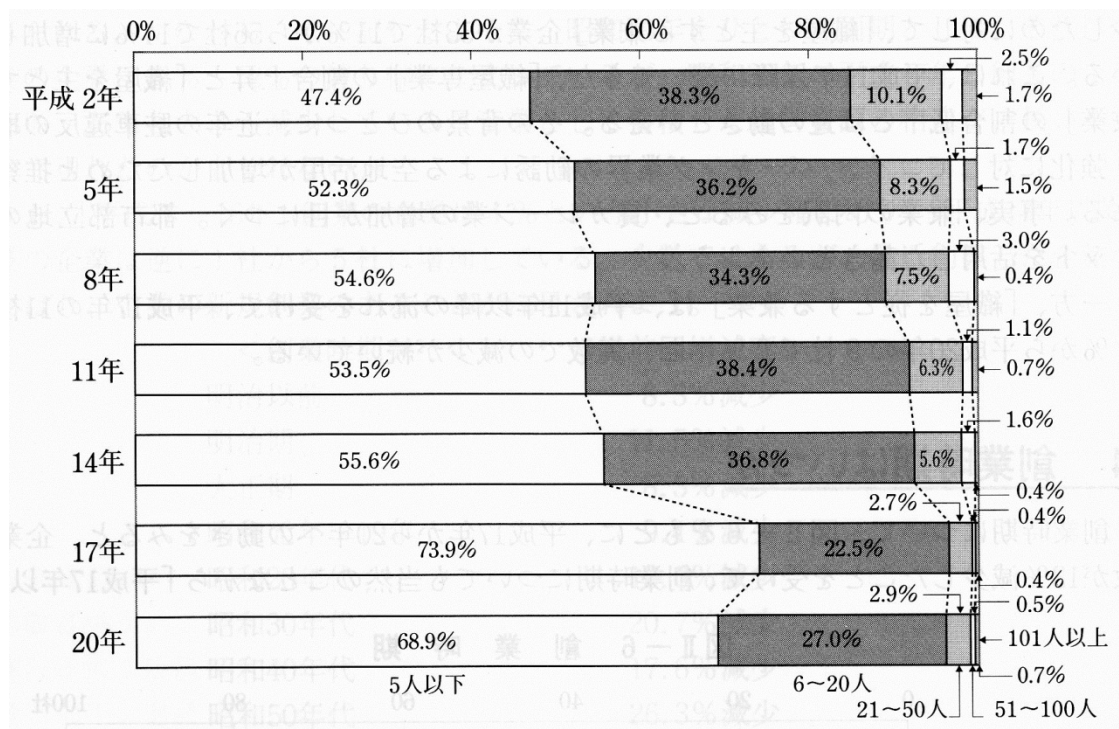
ここまで、西陣の土着性が崩壊していること、そして、にも関わらずそれを基盤とする

西陣の地域生活の特殊性が根強く残っていることが明らかとなった。最後に、松本の研究の肝であった、土着性と構造的特質の現在における関係を明らかにしていきたい。果たして現在においても土着性と構造的特質の規定被規定の関係は認められるのか。そして認められた場合、松本の仮説通りであれば土着性は構造的特質を存続させるものであるので、西陣織の構造的特質は崩壊し、ひいては西陣織産業そのものが崩壊していることが考えられるが、どうであろうか。そして、土着性の崩壊した現在において、構造的特質はどのような形をとっているのか。

松本の述べる構造的特質を、本研究においても第1章第2節で黒松巖らが提出した西陣機業の〈構造的原型〉、つまり先染めの高級品、製品の多種少量生産、手工的生産、機業規模の零細性、下職—関連補助産業の高度の分業化、織元・貸機関係、従弟制度、仲買・問屋制とし、各々について検証を進めていくこととする。ただ、各特質間には深い関わりがあることを考慮しておく必要がある。松本が「西陣機業は製織に関して、まず先染めの高級品を生産するところに特質を有し、そして製織の各部門における専門化から、多種多様な高級製品（700種にもおよぶ）を少量ずつ織り出している。そのため、製織技術は、各部門の兼業を不可能とするまでに高度化している」と述べている通り、1968年当時、構造的特質の間には切っても切れない関係性があり、同じく語られる必要がある。

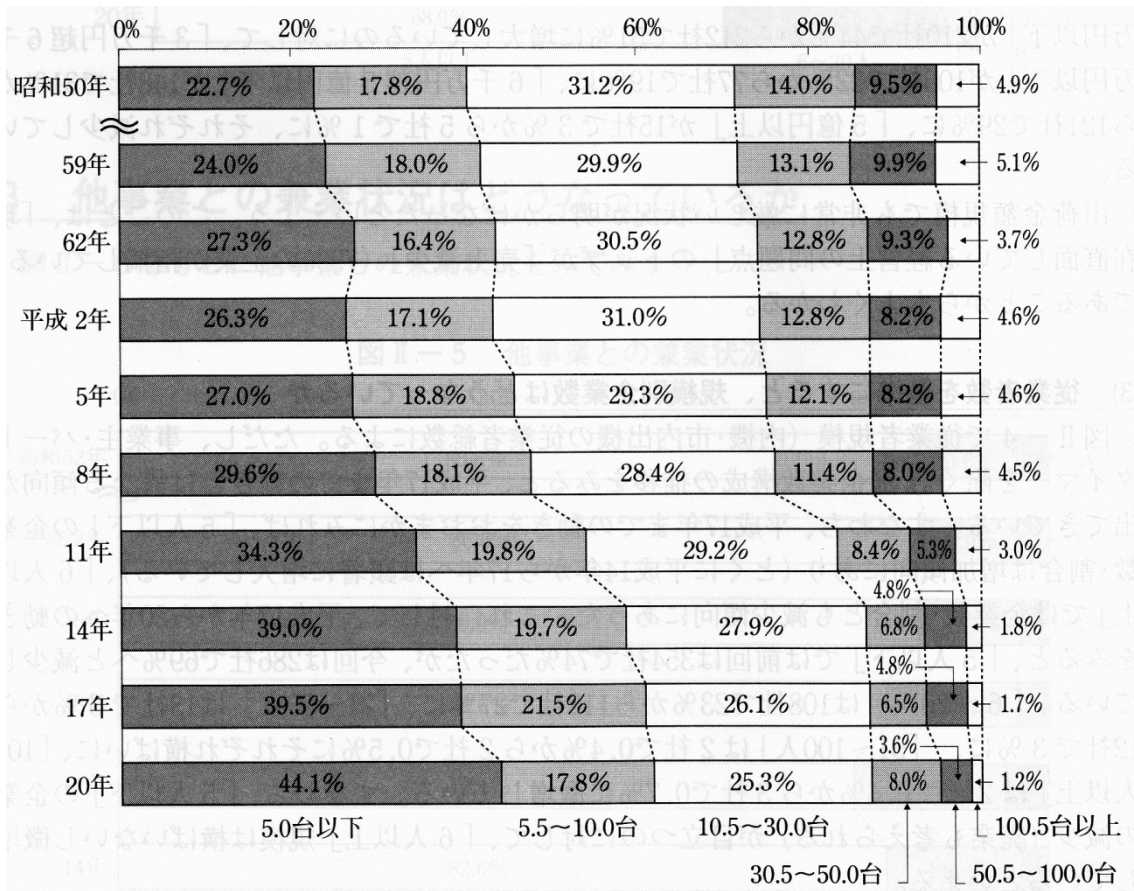
まずは〈機業規模の零細性〉〈下職—関連補助産業の高度の分業化〉について検証していきたい。表17、18、19はそれぞれ従業者数規模別企業数構成の推移、織機台数規模別企業構成の推移、西陣織に関連する事業である。

表17：従業者数規模別企業数構成の推移



出典：第19次西陣機織調査委員会（2010）

表 18：織機台数規模別企業構成の推移



出典：第19次西陣機織調査委員会（2010）

表 19：西陣織に関連する事業

2. 西陣織に関連する事業

単位：社 中段は平成17年対比（%）、下段は構成比（%）

図案	意匠紋紙	綜統*	撚糸**	繊維染色	整経	緋加工	金銀糸	その他***	合計
17	12	19	13	27	20	11	27	3	149
106.3	30.0	100.0	72.2	158.8	76.9	84.6	108.0	37.5	81.9
11.4	8.1	12.8	8.7	18.1	13.4	7.4	18.1	2.0	100.0
(30.85.7)	(70.84.3)	(19.100.0)	(39.84.8)	(81.84.4)	(25.92.6)	(13.100.0)	(45.90.0)	—	(322.87.3)

- (注) 1. 「西陣織に関連する事業」として次の事業を兼業しているものがあつた。
 「綜統*」には、「織物業」を兼業するとして事業所が1社あつた。
 「撚糸**」には、「糸商業」を兼業するとして事業所が1社、「金銀糸業」を兼業するとして事業所が2社あつた。
 2. 「その他***」の事業は、「手芸品の染色業1社、生地染業1社、引箔製造販売業1社」であつた。
 3. 前回調査（平成17年）は複数回答があり、平成17年対比の数値は、その数値との対比である。
 4. 破線の下の（ ）内は各関連工業組合の組合員数とその平成17年対比（%）を示す。ただし、図案は、日図第4部（帯）に所属する図案家数である。

出典：第19次西陣機織調査委員会（2010）

これらの表から、現在でも多くの企業が零細的な企業規模で、高度な分業のもとで機業が営んでいることがわかる。そしてこれは、織機を買えないことなど経済的なもの

ことであろうが、土着性によって補われたある種の孤立性や、孤立性が温存してきた手工的職人的な気質がここにあることが確かなのである。ここで、〈手工的生産〉が存続していることもわかる。

続いて〈先染めの高級品〉という特質について述べていきたい。西陣織が先染めであるということは現在も変わらず、そしてそれこそが西陣織を西陣織たらしめる特徴である。〈高級品〉であるという特徴に関して、表 20 を見てもらいたい。製品 1 単位あたりの平均単価に関しては、昭和 50 年よりも高くなっており、高級品であるという特質はどうやら存続しているようである。そしてそこにはやはり、

表 20 : 製品 1 単位当たりの平均単価

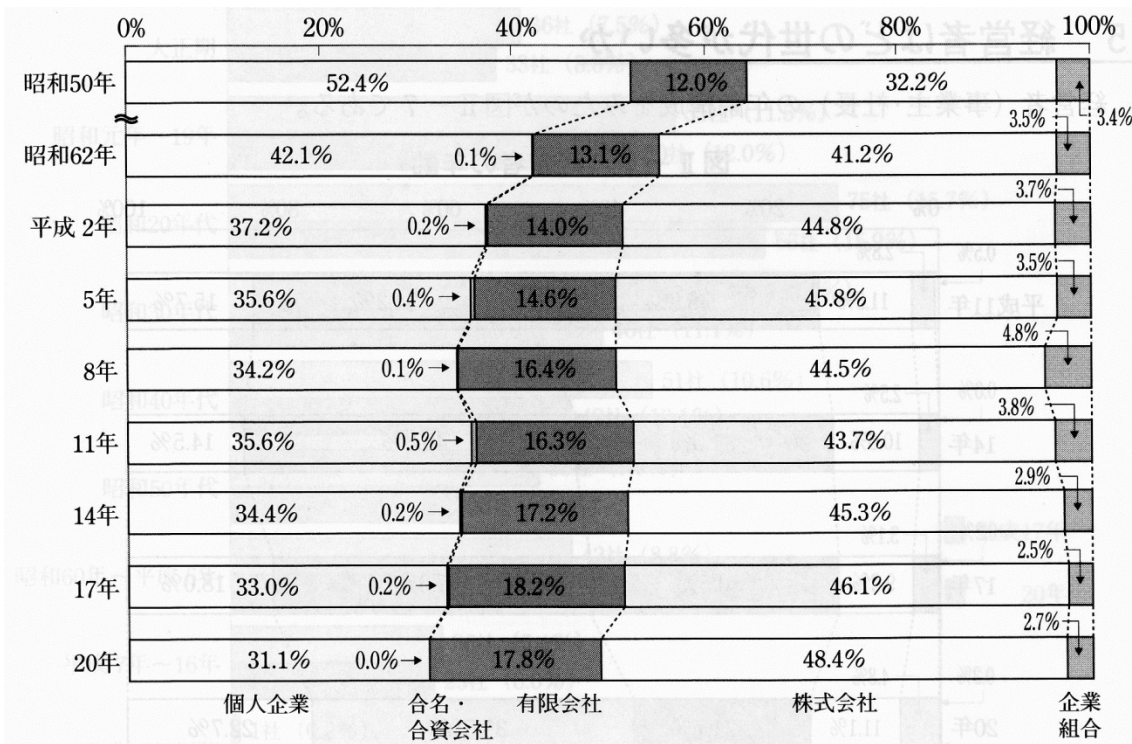
表Ⅲ－４ 製品 1 単位当たりの平均単価 () 内は対前回増減率 (%)

	帯 地 (1 本)	ネクタイ (1 本)
昭和50年	18,292円 (—)	795円 (—)
53年	23,855円 (30.4)	909円 (14.3)
56年	28,662円 (20.2)	919円 (1.1)
59年	33,863円 (18.1)	897円 (▲ 2.4)
62年	34,051円 (0.6)	889円 (▲ 0.9)
平成 2 年	37,101円 (9.0)	1,105円 (24.3)
5 年	28,712円 (▲22.6)	882円 (▲20.2)
8 年	27,767円 (▲ 3.3)	914円 (3.6)
11年	31,237円 (12.5)	886円 (▲ 3.1)
14年	24,006円 (▲23.1)	728円 (▲17.8)
17年	25,894円 (7.9)	843円 (15.8)
20年	25,070円 (▲ 3.2)	865円 (2.6)

出典：第 19 次西陣機織調査委員会 (2010)

次に、〈製品の多種少量生産〉についてだが、これは西陣織の機械化や流通構造の変化、そして海外での大量生産の影響を受けているようである。表 21 を見ればわかる通り、企業形態が変わり、特に個人企業の減少と株式会社の増加が見られる。

表 18 : 企業形態



(注) これ以外に、無回答が、平成 2年0.1%、5年0.1%、11年0.2%ある。

出典：第 19 次西陣機織調査委員会 (2010)

この表からは、〈徒弟制度〉、〈織元・賃機関係〉、〈仲買・問屋制〉の崩壊が見受けられるが、果たして実際にはどのような形となっているだろうか。〈徒弟制度〉に関しては、形を変えて存続している。つまり、〈徒弟制度〉は、経済成長期における個人企業の会社化などによって失われていき、そうすると土着性が失われた西陣においては職人がいなくなると考えられるが、それと同時に大学出身者や芸術大学出身者が、会社化した企業に雇われていくという現象が生じた(就職氷河期で仕事がなかったということに影響しているが)。このように徒弟制度は会社における先輩(社長)、後輩という形に変わり、技術の継承方法も変わっているのである。そこでは技術力の低下といった問題が生じているのだが、今回は詳しく触れないこととする。〈織元・賃機〉の関係は、株式会社の波を受け一部において大企業の会社と社員という形に変わっているように思われる。〈仲買・問屋制〉については、行ったインタビューで、問屋が商品の良さをわからなくなってしまったという声がたくさん聞かれたが、これは問屋が巨大商社に形を買えたことに原因があるろう。

構造的特質に関してみてきたが、まず、松本通晴の仮説通り、土着性と構造的特質の規定・被規定の関係を発見することができた。そして、土着性が崩壊しているにも関わらず西陣機織という産業が消滅せずに存続している理由として、構造的特質はたとえば〈徒弟制度〉のように崩壊しているのではなく部分的、あるいは全体として形を変え、西陣産業を支えているということがわかった。

終章

松本通晴の研究視点を借り、西陣の地域生活の特殊性と構造的特質、ひいては西陣機織産業についての関係性をみてきたが、そこにはやはり切っても切れない関係性があり、人々の意識に潜む文化があった。土着性が失われてもその文化は根強く残り、構造的特質は形を変えながらも西陣機業を支えていることが明らかとなった。西陣の過去から今日までに至る構造や規模の変化の要因を、西陣の地域生活に注目し、社会学的な視点から明らかにすることが本研究の目的であったが、それは一部の視点からではあるが、達成できたように考える。

注

(1) 織物を織るには、緯（よこ）糸が通る杼道をあけるため、経（たて）糸を引き上げなければならない。綜紵はジャカードの指令に基づいて、経糸を引き上げる装置（西陣織工業組合発行『西陣』）。

参考文献

- 第 19 次西陣機業調査委員会，2010，「西陣機業調査の概要（西陣機業調査報告書）調査対象平成 20 年」
- 甲南大学文学部社会学科，2012，「2-1-1 質的調査とはどのような調査なのか」社会調査工房オンライン（2012 年 12 月 19 日取得，http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/02/1_1.html）
- 黒松巖編，1965，『西陣機業の研究』，ミネルヴァ書房
- 松本通晴，1968，「西陣機業者の地域生活——とくに西陣機業を規定する地域生活の特質について」『人文學』(109)，1-31.
- 西陣織工業組合，「「西陣」とは？」「西陣の歴史」「西陣織について」「西陣 web 資料室」，西陣 web，（2012 年 12 月 19 日取得，<http://www.nishijin.or.jp/index.html>）
- 西陣織工業組合，「西陣」，7.
- 小藤弘樹・篠原総一，2006，「西陣機業の現状に関する統計的分析」『同志社大学経済学部ワーキングペーパー』(26)，1-13.
- 芳野俊郎，2011，「西陣地域産業と暮らしの持続的発展を求めて」『佛教大学社会福祉学部論集第 7 号』，109-126.